

ぼくたち・わたしたちのワーク

「勉強」と「仕事」はどこでつながるのか、というテーマを考え始めてほしいというわけで、『16歳の教科書2』を紹介しているこのコーナー。今回は、その5時限目、李相日(リ・サンイル)さんの特別講義です。李さんは、映画『フラガール』で各映画賞を総なめにし、若手ナンバーワンとの呼び声高い日本の映画監督です。「自分は天才じゃないし、おもしろくない人間だと思っている。」と語る李監督の話のキーワードは、『平凡』です。

李監督は、在日韓国人として日本で生まれました。在日という狭いコミュニティの中で生活しているうちに、将来に対して、「このままでもいいのだろうか?」という不安や焦りを感じるようになりました。「在日の世界から抜け出す」ために日本の大学に進学した李監督には、「大学を出てこの仕事をしよう」という目標はありませんでした。そんな自分を「平凡で、おもしろくない」といつている李監督は、どのようにして映画監督になったのでしょうか。

●このままだと一生「このまま」だ

僕はいま、映画監督という仕事をやっています。きっと皆さんは映画監督という職業の存在は知っていても、具体的にどんなことをやっているのか、どうすれば映画監督になれるのか、といった話はあまり知らないのではないのでしょうか。

実際、僕も高校生くらいのときはそうでした。それどころか、映画監督になりたいと思ったこともなかったし、そもそも、ものすごい映画ファンというわけでもなかった。特別やりたいこともないまま、自分の将来について深く考えることもないまま、ぼんやりとすごしていましたね。

けれど、大学に入って就職活動のシーズンになると、そうもいかなくなります。それまで一緒に遊んでいた同

級生たちが、ちゃんとリクルートスーツを着て、就職説明会や面接に出かけるようになる。急に「大人」になっちゃうんですよ。でも、そのとき僕は、どこに行けばいいのかわからなかった。それどころか、どんな手続きを踏めば、採用面接が受けられるかも分かっていない。もっと正直な話をする、わざわざスーツを着て、興味のない会社の就職説明会に行くことの意味が良く分からなかったんです。「何か違うんじゃないか」と思っていた。

「じゃあ、自分は何がやりたいんだ?」そう自問自答した時、かろうじて出てきた答えが『映画』でした。積極的に「映画がやりたい!」と考えたというより、映画ぐらしいか思い浮かばなかった、という感じでしたね。

でも、どうすれば映画の世界で働けるかはわからない。なので、とりあえず、大学4年生のときかな?映画の制作や配給をやっているシネカノンという会社に飛び込んでいって、「映画をやりたいんです!」とかなり無茶なお願いをしたんです。するとありがたいことに、アルバイトとして撮影現場に入れてくれたんですね。

こんな話をする、いかにも行動力のある人間みたいですが、全然違いますよ。少なくとも学生時代の僕には、行動力なんてどこにもなかった。ただ、もう大学4年生だし、追い込まれていたんですね。

何かアクションを起こさないと一生このままだぞ、このままずるずる行っちゃうぞ、という焦りがあったんだと思います。

●平凡だからできること

僕が台本を考えるうえで常に心掛けているのは、「疑う姿勢を失わない」ということです。

なんと言えぱいいのかな、僕ってあんまりおもしろい人間じゃないんですよ。けっこう計算高い常識人で、これといって破天荒なエピソードも持っていない。そもそも、学校でも「自分はどう振る舞えばいいんだろう?」みたいなことを気にしていたような人間ですからね。学校には僕よりおもしろいヤツもたくさんいたし、こ

れまでの経験から、自分が非常識な人間なんかじゃないことを十分承知しているんですよ。

一方、映画としてお客さんを楽しませるためには、つまらない常識から飛び出した非常識な展開、予想もつかない展開が必要になる。だから僕は、脚本を書くときに、いつも「僕が思いついたアイデアなんて、実は平凡なのかもしれない」と自分を疑います。こんなアイデア、ひよっとしたら誰にでも思いつくレベルなのかもしれない。自分ではおもしろいと思っているこの台詞も、全然おもしろくないのかもしれない。

そうやって、思いついたアイデアや台詞をそのままにせず、もう一度ひねってみたり、別の角度から眺めたりという作業を何度もくり返すんです。自分がいいと思つたものを、あえて疑う。これは意識してやらないと、なかなかできないことです。

よく「自分の長所を見つけて、そこを伸ばしていこう」とみたいな話を聞きますが、僕は逆に、自分の平凡なところやおもしろくないところ、月並みなどところに気づくことも、すごく大切ななだと思います。僕はそのへんを自覚しているから、時間をかけて丁寧に考えるし、他者の意見も積極的に取り入れようとしている。そして、きつとこれは僕の武器になっている。もし、僕が「俺はものすごく個性的でおもしろい人間だ!」と思い込んでいたら:僕の映画はちつともおもしろくないものになるでしょうね。

この職業を探せ!

前号の正解は、警察官・消防官でした。

21教室に貼ってある「13歳のハローワークマップ」の中から、次のヒントに合う職業を探してね。

ヒント1 国会や地方議会、省庁で働く者もいる。

ヒント2 集中力と正しい国語力が望まれる。

ヒント3 記号を使い、速く正確に筆写し、それを元に

きちんとした言葉にする。

参考:13歳のハローワーク公式サイト

フーバーぶんぼく

私は文房具好きです。なかでも、実用的で便利なものが好きです。文房具店であれこれ見て回ったり、雑誌やネットの記事などを見たりもします。気に入ったものがあるのとめったに使わないものも、つい買ってしまうこともあります。今回からこのコーナーで、わたしが持っていてお勧めの文房具や気になっている文房具をみなさんに紹介していきます。

もともと文房具というのは書斎(本を読んだり、手紙などを書いたりする部屋。文房ともいうそうです。)で使うものを指す言葉で、筆や紙だけではないそうです。でも、ここでは普段みなさんが使う機会の多いものを中心に紹介していきます。今回は筆箱(ペンケース)です。

さて、みなさんはどんな筆箱を使っていますか。小学校の低学年の人なら、キララタ1付き、鉛筆削り付きのしつかりした筆箱が多いかな。高学年になつてくると、布やビニルでできた大きめのペンケースかな。鉛筆やペンなどでパンパンになっているものをよく見ます。私のお気に入りのソフトタイプのペンケースです。ちよつと短めで鉛筆は入れにくいので、小学生にはお勧めしにくいですが、実はこのペンケースは我が家では家族全員が色違いで使っています。奥さんがピンク、娘が白、息子が黒。私は中が透けて見えるスケルトン。このペンケースの面白いのは専用の輪ゴムがついているところ。持ち歩くときはこのゴムをはめておくとふたが開きません。ゴムの色はケースの色と合わせてあって、見た目もかわいいです。なかなかいいですよ。



☆インターネットで「MIDORI」というメーカーを検索すると見つかります。実物は近くの文房具屋さんで見てください。(手島)